

令和6年度 第1回 学校運営協議会 及び コンプライアンス委員会 報告

1 日 時 令和6年 6月4日(火) 9:30～11:30

2 出席者

運営協議会：運営委員7人、本校教職員11人

コンプライアンス委員会：運営委員会7人、PTA 副会長、本校職員12人

3 会議次第

- (1) 開会
- (2) 自己紹介、会長選出、承認 会長が司会を務める。
- (3) 今年度の学校経営計画について
- (4) 授業参観
- (5) 運営委員からの御意見、御感想
本校からのお願い
- (6) 不祥事根絶に向けての取組について
- (7) 取組に対する御意見
- (8) 閉会

4 協議等記録

(1) 今年度の学校経営計画について

校長：運営委員の役割、学校グランドデザイン、学校経営計画書について説明

幼・小・中・高・地域支援・寄宿舍：

今年度の重点目標など今年度の重点目標について説明

(2) 運営委員からの意見・感想・質問

(司会)：参観前に質問があればお願いしたい。

(委員A)：今年の学校運営協議会に学校として何を望むのか。キャリアパスポートとは何か。小中学部には学部経営の中に出てきているが、高等部には出ていない。どうつながっていくのか。

(校長)：学校と地域を結ぶためのアイデアや、学校や各学部がいただきたいと思うことに対して御意見やアイデアをいただきたい。御自分ができることだけでなく、こんなことができる人がいるという情報をいただけるのもありがたい。そして、いただいたアイデアを学校の中にどのように取り入れていくかを考えていきたい。

(幼主事)：幼稚部には、キャリアパスポートというものはないが、その前段階のキャリア教育チェック表というものを作成し、活用している。人間関係形成能力、情報活用能力など4つの分野について、ステップ1～ステップ3の段階を作ってチェックをしている。

(小主事) : キャリアパスポートは、学期ごとに自立に向けて挨拶ができるとか、身のまわりのことができるとか、児童自身、保護者、教員も一緒に考えていくことができるように導入されてきた。パスポートとなったのは、それをきちんと書面化して残して、次の年、次の学部に進んでいき、できるようになったことを子供が確認したり、将来的に自分の強みとか役割を考えたりすることができるようになっている。

(中主事) : 中学部段階になると、小学部でチェックしたものが大分たまっているので、自分自身の過去を振り返り考えることができる。中学部では、4つの力を項目立てしてないが、自己に合った目標を立てそれを達成するための道筋を考え、取り組むということを短いスパンで繰り返していく。その経験を基に高等部で、職場実習の目標立てなどにつなげていく。

(高主事) : 自己を知るということに役立てている。自己を知るということはなかなか難しい。職場実習に目標がない状態ではいくことはできない。キャリアパスポートを使って目標を立て、帰ってきてから反省し、また次の目標を立てることに活用している。

(司会) : うらやましいと思ったのは、同じ学校の中で、小中高とつながっていること。普通中学校、高校では、移行がうまくいっていない。高校では、独自の進路指導があるので、中学校までのキャリアパスポートを使ってはいない。

(委員 B) : 子供たちにとって地域の聞こえる子供たちの交流も大事だと思うが、小中では、静岡聴覚、浜松聴覚との交流は計画されているのか、高等部は、他県の聾学校の高校生との交流があるのか聞きたい。SNS が発達し、一人ぼっちでも生きていける。交流する気が起きないのは、学校で交流の経験がないからということがないようにしたい。様子を伺いたい。

(小主事) : 過去には修学旅行を静岡聴覚と一緒に行ったことがある。オンラインで一緒に授業をしたり、国語の教材の感想文の交流をしたりする学年もいる。

(中主事) : 三校での卓球大会があり、部活の交流をしている。また、関東卓球大会でも他県の生徒と交流はできる。三校で、グーグルのジャムボードで交流をしたことがある。

(高主事) : 関東の陸上大会、卓球大会に参加し、全国大会にも参加できる生徒もいる。交流しているかははっきりわからない。

(委員 B) : 1年に1回でもあればいいが、文通とかしているのか。

(高主事) : この頃は、ラインをしている。友達は増えている。

(司会) : 参観しての感想や御意見をお願いしたい。

(委員 B) : 生徒が思った以上に減ってきている。学校を守る先生方に頭が下がる。絶対に学校を守ってほしいと強く思った。生徒がいなくなると手話がなくなることと直結するので、絶対に無くしてはいけない。良い聾学校にしてほしい。

(委員 C) : 先生方が本当に子どもに寄り添って指導している様子に感銘を受けた。去年先生方が大きく入れ替わって、手話ができる人が減ったという話だったが、今年はどうか。廊下の掲示で、中学部の詩を読み、いろいろな気持ちをもって生

活しているのだと感銘を受けた。

(委員 A)：ホームページについてだが、年間何回も更新しているということだったが、見たところ、一昨年のままの所がある。一度確認をして、ホームページは何のためのものか、誰に利用されるためのものかを考えたい。また、聴覚障害教育の専門性という言葉が出てきているが、校内で勉強会をしているのならそれも載せたらどうか。この学校はこういう講師を呼んで学習しているのだなと分かるのもいいと思う。

また、目的のものに入りにくいホームページである。教育相談に行きたいと思った時に、すぐに出てこない。これも直す必要がある。

(委員 D)：幼稚部から高等部までつながりが持てることがすばらしいと思った。幼稚部のお子さんたちと金岡保育所は交流をし始めたところだが、金岡保育所の子どもたちにとっても友達との出会いというのは、うれしくわくわくするものだし、障害のあるお子さんに実際に関わるといことが、いろいろなことを感じたり、学んだりする良い機会だと思っている。大きな集団の中でこの子供たちがどう会話をするのか、金岡保育所の子供たちがどう関係を作っていくのか、子供たちが考えながら交流していくことは本当に意義のあるものになる。教員の学びの場にもなって高め合っていけるとよい。

(委員 E)：先生方が生徒に寄り添っていることを感じた。小さい時から、耳から聞いて言葉を知ったり季節を感じたり、本物を見てそれが分かるとか、そういう積み重ねで。小学部中学部と色々なことを覚えて、将来の自立につながっているということが分かった。その先の生徒さんの自立とか働くというところで、私達企業側がもっといろいろな意味で連携を取って関われる場があるといいと感じた。雇用を受け入れますよということだけでなく、地域のつながりというところで何かできることがあるといいと思った。

(委員 F)：娘は0歳からここに通っている。当時乳幼児クラスは人数が多かったが、幼小中高の在籍人数が少なく、同学年の子と触れ合うことが少ない。今日見たところ、幼稚部も小学部も人数は多くて、教室もたくさん使っているなどと思って見た。娘は、幼稚部の時からバスを使って学校に通っていたので、歩いてくる道すがら地域の方から声を掛けてもらって、やり取りがあり、そこから言葉のやりとりの練習をしたりして、触れ合う場があつてよかった。また、金岡保育園での交流でも、友達のお名前を覚えたり、保育所以外で会った時にも声を掛けてもらったり地域でも同じようにしていただいたのが親としてとてもうれしかったし、娘も話ができてうれしさがあつた。今は高等部にいるが、職場実習で人とのふれあいに動じないで、積極的に入り込むことができる性格になったのも地域の人のおかげでもあると思う。

(司会)：市立中高等学校の評議委員会の中で、こんな話があつた。中等部ができてから卒業生の進路先が変わってきた。中等部開校当時、近所の小学校から中等部へ行く子供はほとんどいなかったが、最近、近隣の五小、金岡小、沢田小から受験する数が増えた。異学年の子とも交流すると上の学年の出口でもものすごく変わるという説明を受けた。静浦小中学校が統合されたときも、同じ学校に小学

生がいるということで中学生がよいお姉さん、お兄さんになろうとすることで立派になるということがあった。この学校は、最初から乳幼児から高等部まで同じ学校にありピンとこないかもしれないが、すごく刺激的な環境にあるということだと思うので、そのことを有効に使うといいと思う。

それでは、御質問にあった先生方の手話力の向上についての現状、そしてその手立てについて、また、ホームページの更新について学校から説明願いたい。

(校長)：手話の学習では、新任の先生も学べる手話として、朝の打ち合わせに行っているワンポイント手話での学習、放課後の自立活動研修会での手話学習会というものを重ねていきながら、今年度も手話検定を実施する。教員、保護者、生徒に呼びかけをし、2・3級の検定を実施する。手話力向上の自分自身の成果として積み重ねていきたいと考えている。朝のワンポイント手話は、検定の3級の内容を学んでいる。生徒が少なくなってきた手話がなくなってしまうのではないかという心配は率直な御意見だと思う。学校の立場としても、保護者の意見としてもそうだと思う。今、人工内耳の子供が増えて、手話がなくてもコミュニケーションが取れると考えている子供もいる。ただ、卒業後に人工内耳を外して手話を使う生活をする子供も実際多い。同じ学年で育った子供達との交流はずっと続いている。そういう意味では、人工内耳の子も補聴器の子も手話を使ったコミュニケーションをとることは必要なことだと思っているし、そのための聾学校だと思っている。ここをなくすわけにはいかないと強く考えている。今後大丈夫と言われると心配はあるが、生徒を増やしていかなければいけないと思っている。ただ現状としては、普通小中学校に在籍し通級指導教室に通って来る生徒の方が、在籍生徒の数より多いという現状がある。普通小中学校を選択して行っているわけであるが、健聴の子の中にいると自分をなかなか出せないというお子さんもいるし、高等部を受験して本校に戻ってくるお子さんもいる。受け皿としての聴覚特別支援学校の意味もあるが、それだけでなくここで育てていくということを基本として考えていきたい。

ホームページについては、御指摘のとおりである。早急に改善をしていきたい。今年度、県のホームページのシステムが変わる予定で、表示の仕方が変わるかもしれない。

(委員 A)：まず、ホームページで何を見るかと言うと、校長が何を考えているのか、入り口はどうか、出口はどうか、進路状況はどうか。今、令和3年度の進路先までしか見ることができない。進路の状況が分からないのでは、この学校を選ぶことはない。この学校で教育したことがどう成果として出ているのかわからないということである。しっかりと出ていなければ魅力にはならない。

(司会)：この学校がどういう学校なのか知りたい人が、見やすいホームページに是非してほしい。見たがる人がどういう人なのかを考えて作ってほしい。

(委員 A)：今月はどれくらいの人が見たかカウントはできているのか。

(校長)：カウントはホームページ上では示されていないが、カウントはできている。

(委員 A)：その確認をしていく必要もある。

(司会)：魅力のあるホームページを作っていくようにしたい。

委員の方に、学校の経営基本方針の承認の決を採ります。承認していただける方は挙手をお願いします。

(委員)：全員挙手。

(司会)：承認させていただきました。

(教頭)：学校から運営委員の方々からアイディアをいただきたいことを学部から伝える。

(高主事)：草花を使った製品づくりをしているが、流通の勉強も含めて職業の学習にしたいと思っている。マージンを取らないで、製品を置いて販売してくれるところ、生徒が製品を持っていくことができる所を探している。教えていただきたい。

(中主事)：地域の商店の方には、総合的な学習でお世話になった。実際に働いている方からお話を聞くことはよい学習になるので、また、地域の方に御協力いただきたい。

(小主事)：すれ違った時などに、話しかけて会話をしていただきたい。アレンジメントを教えてくれる方、英語を教えてくれる方など、人材の紹介をしていただきたい。

(幼主事)：買い物学習、言語活動の一環で近くのお店に出向くことが増えてきた。やり取りに時間がかかり、他のお客さんに迷惑を掛けたり、御協力をいただいたりしながらやっているが、是非お声掛けいただいたり、御協力いただいたりしたい。

(寄宿舎)：合同祭を今年も行う。手話を使って話しかけてくださる方もいらっしゃる。舎には引っ込み思案の子供もいるので、お声掛けいただきたい。

(教頭)：本校は、聴覚に障害がある子供たちがいること、沼津市だけでなく、他区の地区からも通ってきていること、寄宿舎があること、泉町地区と学習活動のつながりがあること、学部の人数が減ってきたことはあるが、コンパクトで活動しやすいという特色がある。しかし、課題として少人数ということで集団での意識、社会自立の点で弱い。学校だけでなく、地域の方とつながって地域の方のお力もお借りして育てていけたらと思う。第2回の協議会では、今学部からお願いしたいことのアイディアなどもいただきながら、こんなことができそうだという話ができるとありがたい。

(委員A)：第五地区東の通信があると思うが。

(委員C)：コミュニティ通信があり、自分が責任者である。

(委員A)：それはどれくらいの頻度で発信されているか。

(委員C)：今年度3回出す予定。

(委員A)：私は、原地区に住んでいるが、原のセンターだよりは月1くらいで来るが、地区には中学校が1校、小学校が2校、特別支援学校が1校あって、センターだよりはこの4校のコーナーがある。文化祭があった、修学旅行でどこそこに行ったなどと載っている。また、学校のおたよりも添付されて回覧板で回ってくることがある。それだけでも何をやっているのかわかる。受け皿がないとだめだが、ホームページと同じように発信側とそれを広げる側がうまく融合できる

とよい。

(委員 C) : 載せることができる。

(司会) : 学校だよりがあればそれを回覧板で回すことができる。学校だよりがあれば、お声掛けいただければ何部あるとよいということをお返しできる。地域に情報発信できる。

(委員 B) : 高等部からのお願いがあったが、今は、障害者差別解消法があるので、行ける所に行くだけでなく、行ったことがない所でも積極的に行くべきだと思う。もし、行って問題が起きたら、勇気をもってなぜだめなのか問題にし、改善していくことも学校の役割ではないのか。同時に生徒たちが差別された悔しい思いも覚え、障害に気づく経験もさせていく。そういう意味では、学校は迷惑を掛けない場所に行くのではなく、堂々とどんな店でも自由に行って、行ってみてだめだと言われたらなぜだめなのかと問題を起こせばいいと思う。今は、障害者差別解消法があるのに、なぜだめと言われるのか、あなたのお店が間違っていますとやり合ってもいいのではないか。今はそういう時代で、「お願いするよりやってみる」でいいのではないか。先生と生徒と一緒に戦っているのを見てみたい。

(司会) : トラブルも学習だということですね。

(教頭) : 色々な御意見をいただき、第 2 回、第 3 回も楽しみである。いただいた御意見を学校でも考えていきたいと思う。

(3) 不祥事根絶に向けての取組について

(教頭) : 今年度の取組について説明

(生徒指導課長) : 力を入れて取り組むこと、生徒指導に関わる共通ルールについて説明

(教頭) : 昨年度の学校評価、生徒評価で他の項目と比べて指数が低かったということで、大きな反省となった。今年度は、学校運営の中でもここを重点にして行っていきたいという考えから、一番の所に載せている。この意識を全員で持って取り組んでいきたい。何か御意見があったらお願いしたい。
御意見がないようなので、これでコンプライアンス委員会を終わりたい。

(今後の予定)

第 2 回 学校運営協議会 10 月 2 日 (水)

第 3 回 学校運営協議会 2 月 19 日 (水)